

[031]九州大学教育社会学研究集録表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/7434526>

出版情報：九州大学教育社会学研究集録. 31, 2026-03-15. Seminar of Educational Sociology
Department of Education, Graduate School of Human-Environment Studiess Kyushu University
バージョン：
権利関係：



2025 年度論文勉強会

2025 年度、木村研究室では、2 回の論文勉強会、Book Talk と統計勉強会を行った。論文勉強会とは、木村研究室に所属する学部生や院生が自主的に運営し、主に社会学に関する文献について議論する場である。今年度は、伝統的な論文勉強会に加え、統計勉強会の復活と、Book Talk という新しい勉強会方式を試みた。

論文勉強会は、木村先生の推薦する文献を参照しながら、研究室の学生の関心や研究テーマに近いものをゼミ長、またはゼミ生が選ぶ。論文勉強会当日までに、議論するのに十分なレジュメを参加者全員が持参し、それに基づいて議論を進める形式で行う。レジュメの作成に関しては、前年度より挙げられた 3 つの視点「論文の骨組み」、「分析結果と解釈の整合性」、「論文の課題、研究タイトル、結論の整合性」を意識した。

【論文勉強会】

第 1 回 2025 年 5 月 23 日(金)

取り上げた論文：

- ・小林元気, 2024, 「地方公立高校への国際バカロレア導入過程における葛藤の論理」『教育社会学研究』115, pp.27-47.
- ・荒牧草平, 2022, 「日本社会における学歴再生産とブルデューの社会学理論—文化資本指標・受験界・教育的地位志向—」『教育社会学研究』110, pp. 47-67.

第 2 回 2025 年 6 月 6 日(金)

取り上げた投稿予定論文：

- ・陣内未来「日本語における言語コードの構造と社会関係資本—N. Lin の地位想起法へのスパース主成分分析の適用—」
- ・木村拓也「テスト技術の固有性がもたらす効用と限界—テスト技術の発展は教育の何に寄与するのか?—」

【統計勉強会】

第 1 回 2025 年 6 月 13 日(金)

第 2 回 2025 年 7 月 4 日(金)

使用教材：

- ・村井純一郎著, 2013, 『はじめての R—ごく初歩の操作

から統計解析の導入まで—』北大路書房。

【Book Talk】

2025 年 10 月 24 日(金)

取り上げた書籍：

- ・豊永耕平, 2023, 『学歴獲得の不平等：親子の進路選択と社会階層』勁草書房。(序章+好きな章)

2025 年 12 月 5 日(金)

取り上げた書籍：

- ・『教育者社会学研究』第 116 集 2025

【自主統計勉強会】

使用教材：

8 月～11 月 (隔週水曜)

- ・南風原朝和 (2014) 『心理学統計の基礎 統合的理解のために』有斐閣アルマ。

1 月 7 日(水)

- ・荻谷武彦 (2000) 「学習時間の研究—努力の不平等とメリトクラシー—」『教育社会学研究』第 66 集, pp.213-230.

1 月 14 日(水)

- ・胡中孟徳, 2017, 「中学生の生活時間と社会階層」『教育社会学研究』第 100 集, pp.245-264.

論文勉強会に関して、第 2 回では二人の投稿予定論文を読み、各論文のオリジナリティと自己の研究への考察、質問したいことをレジュメにまとめた。オリジナリティとしては、「どの先行研究を、どのように乗り越えようとしているのか」という議論に焦点が当てられた。その際、論文投稿にあたっては、先行研究の選定が極めて重要で、研究の意義を感じさせるストーリー形成の重要性が強調された。また、実際に論文を書いた著者へ直接質問できる機会は非常に貴重であった。どのようにデータを取得したのか、どのような経緯で研究手法を選択したのかなど、普段の論文勉強会では聞くことのできない論文の裏側を覗くことができた。

統計勉強会に関して、一人では継続が難しいといわれる R に挑戦し、参加者同士で議論しながら学習を進めることで、統計に対する意欲を高めることを目的として始めた。全員で同じ本を基礎から学ぶ形式をとったことにて、量的研究に苦手意識を持つ学部生も、実際に R を操作しながら分析手法の流れやデータ処理の過程を具体的に理解することができた。また、エラーや疑問点は AI に聞きながら解決していくという方法を共有したことで、勉強時間外でも各自で試行錯誤しながら学習を継続できる基盤ができたことは成果である。従来は、そこで学習が止まってしまうことも多かったが、AI を補助的に用いることで、自分で原因を探りながら修正していく姿勢が育まれた。一方で、統計勉強会の課題点として、開催の間隔が空いてしまうことで継続的な学習リズムを維持しにくいこと、参加者ごとに理解度や進度が異なり、個人作業に移行してしまうこと、対面とオンラインを併用した際に議論や共有が難しくなることなどが挙げられた。そのため、残りの章は各自で学習を進める形に移行し、後期からは、Book Talk への一本化と、自主統計勉強会への引継ぎを実施した。

Book Talk は、論文ではなく指定の本の中の好きな箇所を各々読み、そこで得た学びを共有する形式で実施した。第1回の書籍は、豊永耕平, 2023, 『学歴獲得の不平等：親子の進路選択と社会階層』勁草書房である。本書は、2024 事業年度日本教育社会学会第 11 回奨励賞（著書の部）を獲得しており、学歴の獲得に不平等が生じるのはなぜか、高校生とその母親を対象とした質問紙調査とインタビュー調査により明らかにした書籍である。序章を必読とし、それ以降の章は好きな箇所を読むように指定した。序章の構成に関して、先行研究で述べられたことが分析の視点でも反復されており、一貫性が感じられる一方で、先行研究に詰め込みすぎている印象がありわかりにくいという意見が出た。学歴社会論という膨大なテーマを混合研究法という量・質両方のアプローチで明らかにしようとしているため、すべての章の前提となる序章に情報が集約されたと考えられる。他方、論文を投稿する際は、限られた枚数で何を明らかにしたのかを明確にするため、博論の序章や書籍の序章とは異なる論理展開の構造が異なると考えられた。

自主統計勉強会では、希望者のみ隔週水曜に、南風原朝和 (2014) 『心理学統計の基礎 統合的理解のために』

有斐閣アルマの該当箇所を読み、統計理解を深めた。それによって、統計手法をばらばらの公式として覚えるのではなく、相関・回帰・分散分析・因子分析などを共通の線形モデルとして統合的に理解するのに役立った。数式説明が比較的多く、初学者にとってはやや抽象的で難解であったため、勉強会当日は疑問点の解消や、実際のお用例、他の解説の共有を行った。本1冊を1周したが、そのみですべてを理解するのは困難であるため、実際に分析を行う際この本に立ち戻って研究の理解を深めていきたい。自主統計勉強会の後半では、計量分析を用いた論文の中から各自が関心を持ったもの一つ取り上げ、その内容について議論を行った。第1回は、高度で複雑な統計手法を用いなくとも、研究課題の設定や論理展開によって十分に意義ある研究が成立していることを確認した。統計手法に関しては、層化多段抽出による抽出法の理解や現在この研究をすればどの統計手法が適切かなどを話し合った。第2回では、1回目で扱った論文を先行研究として引用している別の論文を取り上げ、先行研究のどの点を継承し、どの点を乗り越えたと主張しているのかに注目して検討した。この研究によって何が明らかになったのか、社会にどのような影響を与えるのかをより詳細に話し合うことができた。

総括すると、2025 年度は統計勉強会を復活させ、計量分析に対する理解を深めた一年であったといえる。統計手法そのものの学習だけでなく、計量分析を用いた論文の読解や議論を通して、研究における分析の位置づけや先行研究との関係性についても理解を深めることができた。一方で、来年度への課題として、勉強会の準備や議論に時間を要することで、自らの研究が後回しになる場面があったほか、実践的な分析手法については最終的に各自で改めて調べ直しながら進める必要があった。また、参加者が限られてしまったのも課題点である。そのため、来年度からは、最初から開かれた環境の統計勉強会を設計し、文献を読むだけでなく、実際にデータを用いて分析を行いながら理解を深めることが必要である。R や SPSS などを用いた実践的な演習を通して、分析手法の適用条件や結果の解釈まで含めて習得し、研究に活用できる実践的知識を身につけていきたい。

(文責：修士1年 市丸綾由莉)